

Title	歴史哲學より觀たる唯物史觀
Sub Title	
Author	船田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1935
Jtitle	哲學 No.14 (1935. 8) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000014-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史哲學より觀たる唯物史觀

船 田 三 郎

所謂唯物史觀は、哲學的頭腦を有し、しかも歴史に通曉せるものが歴史を如何に解すべきか」と云ふが如き單なる理論的興味よりする歴史に關する解釋ではなくして、實踐的社會問題解決の根據として出來たものであるから歴史に關する理論的欲求を満足せしむると云ふ様に解しての歴史哲學的見地よりこれを考察すると云ふことは或は不當であるとも云はれやう。然しながら唯物史觀は實踐的目的を果さんとする企圖の根據としての理論なることは、なほ自然力を支配して、これを實踐的目的に適合せしむる爲めの根據としての理論的自然科學と毫も異なるところはない。約言すればその動機の如何にかゝはらず、理論は理論であるのであるし、且つ唯物史觀の答へんとする問題は從來歴史哲學者の常に解かんとする問題であるのであるから、唯物史觀を歴史哲學より見ると云ふことも、必ずしも

不當ではないであらう。

然らば唯物史觀は歴史哲學上如何なる問題を解かんとしたのであるか。これに答へんとすれば、その前提として先づ歴史哲學そのものは一體如何なる問題を取扱ふものなるかを明かにせねばならぬであらう。尤も今これをこゝに詳論するの要を見ないが、要するに歴史哲學は通例、形式的歴史哲學と實質的歴史哲學とに區分せられる。前者は歴史の認識に關係するもの、即ち歴史の認識論や、その論理學である。後者は歴史そのものを對象とし、その發展の起點と終點、及びその發展過程如何の問題に關係する。換言すれば史的發展を促がす原動力と、その終局目的、及びその過程の必然性の問題に關すると云ふことが出來やうが、唯物史觀は云ふ迄もなく實質的歴史哲學に屬するもの、従つて歴史發展の原動力は如何、その發展過程の必然性は如何に説明せらるべきかを主たる問題として取扱つてゐるものと云はねばならぬ。しかしそれは又歴史の終局に關する問題にも觸れてゐるのであるからこゝでは主としてこれ等三つの問題について考察して見よう。

然らばこの唯物史觀はこれ等の問題を如何に取扱つたのであるか。先づ順序

としてこゝでは歴史の原動力に關する問題から始めよう。何人も知るが如く、唯物史觀はヘーゲルの觀念論的、理想主義的歴史觀に反對して生じ來れるものである。即ちヘーゲルがイデーと云ふが如き精神的な力を以て世界の根柢におき、世界史を以てこのイデーの顯現なりと看做したのであるが、これは唯物史觀の主張者によれば、本末を顛倒し、事實を倒逆せるものである。歴史を發展せしむる原動力は精神ではない。眞に歴史を動かす力は直接生活に關係ある經濟的生産關係、この關係を生せしむる生産力でなければならぬ。精神的現象は單にこの生産力の發展に基づく生産關係の映像或はその反射に過ぎないのである。かくの如く觀念論的、或は唯心論的歴史觀が精神を以て歴史の原動力とするに反對して、物質的生産力を史的發展の原動力と看做す所よりして、この史觀がその主張者によつて唯物論的と稱せらるゝ所以であるのだが、この唯物史觀なる名稱が眞にその主張する史觀の内容に適合するものなるか如何は姑く措き、こゝに先づ問題とすべきは、彼等をしてかゝる主張をなさしむる動機は抑々那邊に存したかと云ふことである。この問題は多くの學者によつて屢々論せられた所であるから、無論多言

を要しないが、然しこのことを明かならしむることは、唯物史觀の本質を理解せしむる所以でもあると思惟するが故に、少しくこのことに觸れて見よう。

更めて問題を提出するが、一體ヘーゲル學徒たりしマルクスをして唯心史觀を捨て、これとは全然正反對の立場たる唯物史觀を採らしめたる動機は何であつたか。換言すればマルクスは何故に物的生産力を以て歴史の原動力となすに至つたのであるか。單にヘーゲルの歴史哲學に反對すると云ふ點よりこれを見れば、敢て唯心論的見地を捨てざるも、尙これに反對することが出来る。史家ランケの如きは、現に彼に反對したのであるが、ランケより觀れば、歴史研究はあく迄も經驗的でなければならぬ。従つて哲學の方面からして理念の發展はかくあるべきものと假定し、これから歴史を先天的に構成すべきものではない。しかるにヘーゲルの所謂「世界史の哲學」は初めから哲學的に理念の發展過程を規定し、これよりして歴史を先驗的に構成して居るのである。しかしかゝる仕方によつては史實は拘束歪曲せらるゝを免れない。しかし歴史研究は經驗的ならざるべからざるが故に、理念を否定するを要しない。否、この理念こそはランケによれば史實の詳

細なる研究によつて推知せらるべきものであつたのである。唯これを哲學的に規定し、これによつて歴史を説くべきものではない。かくの如くランケはヘーゲルに反對はしたが、イデーを迄も否定することはしなかつた。尤もこのイデーの解釋は彼此相違する所あるは云ふ迄もないが、しかもランケの立場はやはり唯心論的であつたと云ふことが出来る。然るに唯物史觀はヘーゲル哲學の *conditio sine qua non* たるイデーにも反對したのであるが、それは一體如何なる根據からであつたか。マルキシズムの思想發展を説くものはフォイエルバッハの影響であるとか、佛蘭西に於ける社會主義的思想の影響であるとか、英國經濟學の影響と云ふ様なものを舉げる。勿論かゝる影響を認めないわけには行かない。しかし彼等をしてこれ等の影響を受けしめたものは何であつたのか。それは結局する所、彼等の直接體驗ではなかつたであらうか。唯物史觀の主張者は單なる書齋の人ではなかつた。その直接體驗する所は現實社會であり、時事問題であつた。そしてこの方面に於て彼等は經濟的關係の各人の生活に至大の影響あるものなることを日々に體驗した。彼等は經濟的力の物的並びに精神的生活に及ぼす影響を

ば刹那々々に見ざるを得なかつた。彼等は所謂精神的なるものの經濟的社會的事情と密接に關聯して、到底この兩者の切り離し得ざるものなることを意識した。否單に切り離し得ざるのみではない。經濟關係こそは實に精神的發展の基礎をなすものなることを洞觀した。彼等はかゝる體驗に基づいて獨逸の觀念論を顧み、そしてそれが眞に歴史を理解せしむるものなるか如何を検討した時、これに否定の答辯を與へねばならなかつた。獨逸の觀念論は歴史にとつて最も重大なる役目を演ずる經濟に對しては殆んど無理解であつた。この觀念論によれば唯宗教、道德、法律、政治、藝術と云ふが如き精神的なるもののみが、人間の關心する所のものであるかの如くに見えた。然しながらマルクス等の體驗は、個人も、國民の歴史も、世界の歴史も皆リアルな實生活、即ち經濟的關係によつて決定せらるゝものなることを彼等に教へたのである。かゝる見地から見て、彼等のフォイエルバッハにさへも慊らなかつたことが理解せらるゝ。今この兩者の關係について云へば、無論彼等は一時はフォイエルバッハ學徒であつた程で、その人間主義の彼等に及ぼせる影響は非常に大きかつた。一體彼等は、否一般に青年ヘーゲル學徒等は

宗教に對する反對を云ふ實際上の必要から、英佛の唯物論に走つたのであるが、しかし彼等はかくすることによつて、イデーを以て本源的なもの、自然は單にこれより派生せるものに過ぎないと見る己れ等の奉ずる學說と衝突せざるを得なかつた。彼等はかゝる矛盾の中にあがいて居た時、フォイエルバッハの「基督教の本質」があらはれた。これによつて彼等は忽ちにして矛盾を解くことが出來た。彼等はこれによつて、自然は一切の哲學と獨立に存在するものなること、自然は一切の基礎で人間もこの上に成長するもの、故に人間自らも自然の產物であることを知つた。彼等は又これによつて自然と人間以外には存在するものなく、所謂人間以上の存在者は、實は我々の空想の產物で、吾人自らの本質の反映に過ぎないものであることを知つた。かくて彼等は彼等の矛盾から脱却することが出來たのであるから、彼等のこの書に對する感激の如何に大きかつたは想像するに難くはない。實際エンゲルスは自ら「我々は一時は皆フォイエルバッハ學徒であつた」と云つた程であるが、しかしかくの如く彼等に多大の影響を與へたる新解釋も遂には彼等を満足せしむることは出來なかつた。彼等から見ればフォイエルバッハの人間

も、結局は抽象的な所謂「人間なるもの」に過ぎなかつた。無論、彼等はフオイエルバッハが人間をも「感性的對象」となす點に於て、純粹なる唯物論者に優る所あるを認めはしたが、しかし彼等によればフオイエルバッハは人間を「感性的活動」として、即ち與へられたる社會的關聯の中に於て、或は人間をして人間たらしむる生活條件の下に於て之を把握しなかつた。彼は現實的な、個人的な、肉體を有する人間を只、感覺に於て認める丈けであつた。即ち彼は愛と友情と云ふもの以外に於ては人間對人間關係を知つて居ない。しかも彼はこれを觀念化して居るのである。彼には現在の生活關係に關する何等の批評もない。従つて彼は感性的な世界をば、これを構成する個人の生ける感性的な活動の總體と解する迄に至つて居ない。彼等はフオイエルバッハの人間主義をかくの如く見たのであるが、それはマルクス等の體驗の結果によるものではなかつたか。彼等の體驗によれば、人間も、その歴史も現實的な社會關係、リアルな生活の諸關係を究めてのみ、正當に解釋せらるべきものであつた。これによつて之を觀れば唯物史觀は、これを主張する人の直接體驗と最も密接なる關係を有するもの、否、この體驗の理論化が唯物史觀であ

つたと云ふべきである。

唯物史觀は上に述べた様に、歴史の原動力を以て物的生産力、經濟的生產關係にありとなすのであるが、これと關聯してこの史觀の特徴をなすものは第二の問題、即ち歴史の發展過程に對する解答である。從來この史的發展過程を考察の對象とするものは、それが外見上偶然的なるが如きも、しかもその根柢には何等かの必然性のなかるべからざることを認めてこれを明かにせんとした。即ち或はこれを目的觀よりし、或はこれを機械觀よりした。前者よりするものは神學的に、或は形而上學的に之を解し、歴史を以て超越的實在者たる神の計畫を遂行するもの、或は絶對者そのものは内在する目的を實現するものと見て、史的發展の必然性を説明し、後者は自然を支配する法則が、又同時に人間社會の發展をも支配するものと解釋した。一は目的論的理想主義的であると云ふべくんば他は自然主義的であった。唯物史觀はこの何れにも據ることは出来なかつた。その前者によることをなし得なかつたのは原動力が神でも絶對的精神でもなくして、實に現實的な生産力そのものであつたからである。かく唯物史觀は目的論に反對する點に於て

は、自然主義に類する。實際唯物史觀は歴史の發展を以て自然作用の如く必然的なものであると云つて居る。しかしながら唯物史觀の自然必然性なるものは歸納的に確定せらるゝ普遍的自然的必然性ではない。換言すれば常に如何なる所に於ても與へられた同一の原因からは同一の結果は生ぜねばならぬと云ふ意味での必然性ではない。何となれば歴史に於ては出來事は常に絶えず變化するからである。故に歴史の法則と云へばそれは發展の法則、運動の法則でなければならぬ。自然科学は因果的普遍的の法則を發見せんとするが、運動の法則はその事とする所ではない。これ彼等が非常に自然科学の影響を受けながら、しかもその點に於て自然主義に反對する所以である。

然らば唯物史觀は發展の必然性を如何に説明するか。唯物史觀は先に述べた通り物的生産力を以て唯一の原動力、他の一切を制約するが他によつて制約せらるゝ所なきものとなすのであるが故に、歴史發展の必然性をばこの生産力とこれより結果する生産關係、社會關係との交渉より説明せねばならなかつた。即ち一定の生産力には一定の生産關係、社會關係が相應する。しかし生産力が發展すれ

ば從來の生産關係、社會の形式はこの生産力と一致し得ざるに至る。尤もこの社會關係は生産力のこれと矛盾する程發展しても尙舊來の形式を維持せんとする。しかし遂にはこの生産力は生産の形式を破壊するに至り、こゝに發展せる新たな生産力に相應する新らしい社會關係が生ずる。換言すれば舊來の社會關係は否定せらるゝ。更にこの新しい社會關係が内部の生産力によつて必然的に崩壊する *Negation der Negation—Dialektik*—運動の法則——こゝに彼等が原動力に關する點に於ては全然ヘーゲルに反對しながら、しかもその方法に於いては辯證法によるものとする所以である。

かくの如く唯物史觀は歴史發展の必然性を主張するが、これは實にマルクス、エングルスの社會革命と云ふが如き實踐的目的と密接なる關係を有する。恐らく如何なる歴史哲學と雖も唯物史觀程、非理論的實踐的興味と密接なる關係を有するものはなかつたらう。しかし又唯物史觀程これをその史論の中に取り入れまいとしたものもなかつた。實に唯物史觀は云ふ迄もなくマルキシズムと云ふ社會主義的運動の理論的根據であつたのである。勿論唯物史觀そのものは決して

目的論的ではなかつた。しかしこの唯物史觀成立の根據として、實踐的目的のその根柢に存したことは餘りにも知れきつた事實で、こゝに詳しく述ぶるを要しないと思ふが、彼等は單に事實を説明し、解釋する哲學者ではなくして、現實の世界に満足せず、これを破壊し、變更せんとする革命的精神に充ちたる人々であつた。「理性は常に存した。只必ずしも合理的形式に於て存しなかつたのみである。それ故批評家は理論的實踐的意識の各形式に結びつき、實存する現實そのもの、形式より、眞の現實をその當爲として、又その終局目的として發展せしむることが出来る」とはマルクスが四十年代に發したる語であつた。この場合批評家とは單に事實を解剖して是非を明かにすると云ふが如き學究者を云ふのではない。彼は云ふ、批評は解剖用のメスには非ず、武器である。その對象はそが單に反對せんとする所のものではなく、正にそが擊滅せんと欲する所の敵に他ならぬ」と。これが彼のヘーゲルの法律哲學批判の序言中で述べた詞であつた。彼にとつては現實世界はあるべき筈の世界ではない。それ批評せらるべき、即ち擊滅せらるべきものであつた。從來哲學者たちは世界をば單に種々に解釋するに過ぎなかつたが、

しかしそれはマルクスから見れば實踐的に革命されねばならぬものであつた。但しそれは何ものにも基づかず、單に頭腦から發明さるべきものではない。却つて頭腦によつて生産と云ふ物的事實中に於て發見せらるべきものであつた。換言すれば彼等の目的とする社會主義的社會の實現の必然的たるべきことが、現實の歴史的事實に於いて明かにせらるべきものであつた。この點よりして、彼等は自己の社會主義を以て科學的なりとし、從來のそれをば空想的なりと嘲つた。空想的社會主義は新社會の要素をば頭腦より構成せんとした。その訴ふる所は時代の歴史ではなくして、只理性のみであつた。彼等(サン・シモン、フーリエ、ブルドン)は社會主義は理論上最も價值あるもの、それ故に又最も努力すべき社會形式なることを示しはしたが、しかしそれが實際に來るであらうと云ふ保證を呈して呉れなかつた。しかし社會主義をして空想に墮せしめざらんとすれば、その必然的に來らざるべからざることが、歴史的事實によつて明示せられねばならなかつた。さればそれは哲學に求めらるべきではなくして、當該時代の經濟に求めらるべきものであつた。彼等が經驗的であり、リアリスチックであつたのも、又獨逸イデオ

ロギーを否定せんとしたるも、こゝに基づくものであつたと云はねばならぬ。

唯物史觀は先きに己に述べたやうに、物的生産力、これに相應する生産關係よりすべて歴史的變化を説明せんとしたるものなることは、よく引證せらるゝが如くマルクスがその經濟學批判の序言中に、一定の生産力に相應する生産關係、即ち社會の經濟的構造を眞の基礎となし、而して法律、政治、宗教、藝術、哲學、換言すればすべての觀念的形式をば、その上層建築となせるによつても明かである。彼によれば、物的生活の生産方法が社會的政治的精神的生活一般を制約するものであるから、人間の存在を規定するものは人間の意識ではなくして、却て逆に人間の社會的存在がその意識を規定するものである。従つてすべて觀念的精神的形式はこの物的生産關係の映像或はその反映に過ぎない。故に又これ等精神的形式間に於ける反對や、爭鬭はそれ自ら丈けのものではなくして、實は已にその根柢に存する生産關係に於ける反對や、爭鬭を表現せるものに過ぎないのである。エンゲルスも亦各時代に於ける社會の經濟的構造が眞の基礎をなすものであつて、法律、政治的制度、並びに宗教的、哲學的思想法と云ふが如き上層建築は、結局すべてこれより説

明せらるべきものである、かくて從來の如く存在を意識より説明する代りに、意識を存在より説明するの道が発見せられたと云ひ、又彼は社會的變化や政治的革命の最後の原因は人の頭腦に、即ち永久的なる真理や正義に關する知識の増加に求めらるべきではなくして、生産交易の方法の變化に求めらるべきものであるとも云つて居る。これ等の言によつて之を見れば、精神的なるものは歴史的變化に對し、その起點及び過程に於て何等の勢力なきもの、又何等の影響を及ぼさざるもの様に解せらる。多くの學者もかく解して唯物史觀に反對する。例へばバルトの如きは云ふ。政治・法律・宗教等の觀念的形式は決して經濟關係によつて制約せらるゝもの、それは云はゞこれを基礎としてその上に立つ上層建築ではない。却つて政治・法律等が經濟關係に影響を及ぼすものである。それ故經濟關係と觀念形式との間には基礎と上層建築との比喻に相應せざる交互の關係が存すと云はねばならぬ。一例を舉ぐれば法律の如きは、經濟の單なるフンクチオンではない。それは獨立的なる生存をなし、且つ經濟にさへ作用するものである。マルクスやエングルスの云ふが如くならばそれは餘りに觀念的要素の力を過小視するものである。

ると。かゝる批評は正當なるか、如何。勿論上に擧げた言によれば、精神的なるものは物的生産關係によつてのみ規定せられるものであつてそれ自らは歴史の發展に何等の影響を及ぼさざるもの、様に見える。彼等は精神的なるものを以て生産關係の單なる影に過ぎざるが如き、例へば模像、映像、鏡映と云ふ種類の語を好んで使用するのであるが、それが益々この考を強うせしむる。しかしながら唯物史觀は精神的なるもの、歴史的發展に及ぼす影響を認めなかつたであらうか。

若しこれを認めないとすればそれはマルクス、エンゲルスの革命的社會主義的倫理の主張と矛盾するものと云はねばならぬ。彼等の主張は現代の社會組織に何等かの意味に於いて變化を及ぼさしむる力あることを認めての主張ではないか。

彼等が社會主義的社會の資本主義的社會よりして必然的に結果し來るものなることを主張するは、少なくともその必然的なことを明かにして、かの社會の出現を促進せしめんが爲めではないのか。若しそうだとすれば彼等は矢張り精神的なるもの、社會關係に及ぼす影響を認むるものと云はねばならぬ。しかしこれを認むるものとすれば、それは先きに擧げた存在を規定するものは意識にあらず、社

會的存在こそ却つて意識を規定するものであると云ふ命題と矛盾するではないか。勿論これを如實にとれば矛盾を犯すと云ふことになるであらう。しかしながらこの命題を解釋せんとする時、同時に彼等をしてその命題を下さしむる動機をも考慮せねばならぬものであらう。彼等は周知の如く獨逸の殊にはヘーゲルの觀念論に就中、その精神に獨自的存在を與へて、これより歴史と自然との過程をすべて説明せんとするに反對する。彼等によれば精神的なるものは決して獨立的存在ではない。それは常に存在によつて規定せらるゝものであるが故に、彼の命題の言はんとする所は意識の獨自性の否定にありと言はねばならぬ。さればかの意識は存在を規定せずとは獨自的な絶對的精神が存在を規定せずとは當然解せらるゝけれども社會的存在によつて規定せられたる意識が存在を規定せずと解するを要しない。彼等にとつて問題たりしものは絶對的な概念の自己發展の否定であつて、精神的なるものと社會生活との交互關係はその主とする所ではなかつた。それ故彼の命題よりして直ちにこの交互關係をも否定するものと推論することは出来ない。實際エンゲルスの如きは明かにこの交互關係を認めて

―殊に九十年以後このことが問題とせらるゝに至つた時―次の如くに云ふ。「政治・法律・哲學・宗教・文學・藝術等の發展は經濟的發展に基づく。しかしそれ等は何れも之に反動し、又經濟的基礎へも反動するものであつて、經濟的狀態が唯一の能動的要因にして、他はすべて所動的結果である」と云ふのではない、却つてそこには交互作用が存する。しかしそれは結局に於て經濟的基礎の上に於ける交互作用である云々と。又唯物史觀によれば歴史を規定する要素は結局する所實際生活の生産及再生産である。マルクスも予も曾てこれ以上の事を主張したることはない。然るに今何人かゝの經濟的要素が唯一の決定的なるものと曲解すれば、その命題を無意味、抽象的にして且つ不合理なる語句に變ずるものと云ふべきである。經濟的狀態は基礎である。しかし上層建築の種々なる要素は歴史的闘争の過程にその影響を及ぼし、多くの場合に於てその形式を規定する。そこにはこれ等要素の交互作用が存すると。かゝる交互關係を認めざれば歴史の解釋は一次方程式を解くよりも容易であらうとは、彼等を辯護するものゝ云ふ所であるが、しかし彼等にとつては歴史現象に於ける交互關係はその主たる問題ではなかつた。か

かる現象の根柢に存して史的発展を必然的たらしむる最後。の原動力は何であつたか。複雑多様にして一見偶然的なるが如く見ゆる歴史を一貫し統一し、よつて以てその發展を必然的ならしむるエンゲルスの所謂 *total Faden* は何であつたか。これが彼等の興味の中心を占むる問題でなければならなかつた。而してこの點に於いて獨逸歴史哲學の彼等に及ぼせる影響を認むることが出来る。何となればカント及びカント以後の理想主義的歴史哲學は、自然現象に必然的法則の支配するが如く、一見偶然的なるが如き史的發展にも必然的なる理法の存することを認めて、これを攻究することがその問題であつたからである。それ故彼等は問題の提出の仕方 に於ては理想主義的歴史哲學と毫も異なる所はなかつた。エンゲルスは好んで *in letzter Instanz* なる語を使用して居るが、彼にとつては歴史の結局的因、即ち因果の系列を辿つてその最後に位する原因、彼の所謂原動力の原動力 *Triebkräfte der Triebkräfte* を究むることがその問題であつた。而して彼等はこれを物的生産力に求めたることは今更反覆するを要しない。彼等にとつては經濟的運動が偶然的なものを通して、これを一貫する必然的のものであつた。しかしか

くの如き、必然性は如何に解せらるべきものか。又この必然性を認むると云ふこと、精神的なるものとの交互作用を認むると云ふこととは一致するか如何。

マルクス、エンゲルスは社會的運動の、或はその發展の自然法と言ひ、又この運動を以て自然過程の如くに看做し而してこれを以て人間の意識、意志、意圖と云ふが如きものには依屬せず、却つてこれを規定するものとなす。しかしながら彼等は又一方に於ては「社會の歴史に於て行動するものは意識を有し、反省と情熱とを以て行爲し、一定の目的を果さんとして活動する人間である」。従つて歴史なるものは人間自らが作るものとなすのである。しかしかゝる歴史に於ては如何にしてかの必然性は認めらるゝか。人類はカントの言つて居る様に、合議により一定の計畫を遂行するものにあらず、又禽獸の如く本能に支配せられてのみ行動するものでもない。各人は任意の動機よりして任意の行動をなして居る。エンゲルスは云ふ。意志は情熱や反省によつて規定せられる。しかし更にこの情熱や、反省を直接に規定する動力は非常に異なり、或は外界の對象なることあり、或は野心なることあり、或は眞理と正義に對する感激、或は個人の憎惡、其他純個人的な各種の

思ひ付きと云ふが如き觀念的動機なることがあると。しかしかくの如き種々なる動機によつて規定せらるる行爲の交互關係たる歴史に如何にして必然性は認めらるゝか。むしろそこには偶然しか存しない様に見ゆるではないか。従つて問題は歴史の必然性と任意なる人間の行爲との間に存する矛盾は如何にとかるべきかに存する。唯物史觀はこの問題を解かんが爲めに、行爲の目的とその結果とを區別し、行爲の目的は人の欲する所であるが、この行爲より實際結果する所のものは欲せらるゝものではない。歴史に於て活動する多數の個人意志は欲せられたるものとは全然異なる、否時としては全然これと正反對なる結果をさへ惹起することがある。このことより唯物史觀は推理して歴史に於ける出來事は各人の有意識的動機よりのみ結果するものではない。更にかゝる動機のかげにはたらく動力がなければならぬ。換言すれば各人は任意の動機よりして、任意の行動をなしながら、その根柢には、かくれたる内的法則が存在して歴史過程をして必然的に一定の方向を取らしむるものであると。この思想は實に獨逸觀念論の歴史哲學を一貫せる中心思想であつた。カントが各個人は意識的には恣意を擅にし

ながら、無意識的には所謂「自然計畫」を遂行するものとして歴史の必然性を認めた
るが如き、シェリングが意識的なるものを自由となし無意識的なるものを必然的
と解し、この兩者の調和を以て、彼れの所謂「同一哲學」の最高問題となせるが如き、更
にヘーゲルが世界精神が、個人の有意識的なる行動を手段として、己れの本質を實
現すと解せる、所謂「理性の欺瞞」と云ふが如き、その説明は必ずしも同一でないに
しも、結局何れも歴史の必然性を説明せんが爲めに無意識的なるものを假定せる
ものと云はねばならぬ。唯物史觀も亦かくの如き無意識的なるものを認めたも
のと云ふべきである。かの自然法とか、自然過程と稱するものはそれでなかつた
か。エンゲルスは無意識的自然に於けると全然類似の状態を歴史界に認めたる
が如き、又已に夙く自然法を以て關與者の無意識性に基づくとなせるが如き、これ
を證するもの、一と見らるべきであらう。それは兎に角唯物史觀に依れば、歴史
は單に人間の意識(意志、意圖)に無關係なるのみならず、反つてそれらを逆に規定す
る法則の支配する自然史的の過程である。とは云へこの法則は、古き經濟學者の
誤れる如く、如何なる所に在ても常に一樣に妥當する法則、例へば物理學や化學の

所謂法則と云ふが如き、過去、現在を通じて妥當する經濟生活の抽象的非歴史的な一般法則ではない。それは寧ろ生物の發展史に於ける法則の如く、吾々の意志の如何ともすべからざる力と内的必然性とを有する意味に於いて自然的なる、歴史の各時代に固有なる意味に於いて歴史的なる法則と解すべきである。かく見て來れば歴史は吾人の作る所であるにしても、その必然性は吾人の所産ではない。今述べた様な意味に於て必然的なものとしての經濟的運動は、然らば如何にして可能であるか。この場合に於てもかの精神的なものとの交互作用は認めらるゝか。それは無論不可能であらう。何となれば經濟的狀態は意識、意志、意圖と云ふが如き精神的形式を規定こそすれ、決してこれに依屬するものではないからである。しかもエンゲルスは先きに云つた様に、經濟的狀態は唯一の能動的原因にして、他は皆所動的結果なりと云ふにはあらず、その間交互作用ありと云ふ。こゝにその主張に彼此相矛盾する所あるが如くに見ゆる。彼等はかゝる難點を避けんが爲めに、かゝる交互作用も結局する所、經濟的狀態を基礎としてその上に於て行はるゝものであると云ふ。然らばこの基礎たる社會の經濟的構造は如何にして

變化發展するか。唯物史觀は生産力が膨脹すれば、それは遂には從來の生産形式を必然的に破壊して新形式がこれに代ると云ふ。然しかく舊形式を破壊して新形式をとらしむる生産力の膨脹は何によつて可能なるか。唯物史觀の言ふ通りであるとするれば、各時代の經濟狀態はジンメルに言つて居る様に受胎せずしてそれ自ら己れの時期以上に出づる力を含むもの、換言すれば經濟狀態の單性繁殖であると云はねばならぬ。ヘーゲルは理念の自己運動と云ふ。而してこれが經驗を重んずる學者によつて、形而上學的なりと批難せられる。理念に代ゆるに經濟關係を以てしたる唯物史觀も、それが科學的、經驗的たることを要求しながら、尙この點に於ては同様の批難に値するではなからうか。

マルクス、エンゲルスは先きにも云つた様に經濟的狀態と精神的形式との交互關係を認めねばならなかつた、否エンゲルスの如きは公然これを認めたのであるが、しかし彼等は單に經驗史學のなすが如く、諸種の文化現象の相互の關聯を究明するに甘んずることは出来なかつた。彼等にとつての關心事は逆立せる觀念論の打破であつた。その爲めには經濟的實際的生活を基礎とし、かくてこれから一

切を説明せねばならなかつた。従つてかの辯證法なるものもこの經濟生活にのみ極限せられ、精神は唯その發展過程に従ふ隨伴現象に過ぎないものとなつた。故にそはヘーゲルの所謂辯證法ではなくしてむしろその變改であつた。即ちヘーゲルの辯證法に缺くべからざるヘーゲルの精神は去勢せられ、そしてそは自然化せられ、經濟化せられた。故に又ヘーゲルに於ける概念の矛盾は捨てられて經濟社會に於ける階級の對立がこれに代るに至つた。それ故ヘーゲルの立場から唯物史觀の辯證法を是非するものは、必ずや種々なる疑惑と困難とに遭遇するに至るであらう。

最後に史的發展と實踐的目的との關係について之を云はんか、唯物史觀の主張者等は先きにも述べた様に、單に世界を種々に解釋するに甘んずる哲學者ではなくして、世界を變更せんとする革命家であつた。それ故彼等は實踐的に一定の目的を有したのであるが、しかしその理論は決して目的論的ではなかつた。彼等にとつては社會主義的社會の出現は理論上望まらるべき價值或は目的ではなく、現在の資本主義的社會組織から必然的に結果して來ねばならぬものであつた。そは

何等かの普遍妥當性を有する道德的原理に、或は何等かの倫理的素質に基くが故に生じて来るのではない。彼等はすべて普遍妥當的且つ永久的なる道德性を否定した様に又この新社會の基礎をかゝる原則に求むることを拒否した。彼等にとつては社會主義は、エンゲルスが「哲學の窮乏」の「序言」中に指摘して居る所によつて明かなるが如く、倫理上の問題ではない。即ち社會主義は資本主義的經濟組織に比して、より道德的より人道的であるが故に現代の資本主義的社會の後に來るべきものと云ふのではない。そは生産力發展の結果、資本主義的生產方法は必然的に崩壊するがこれと同時に社會主義的社會組織の要素が資本主義的社會そのもの、中に形成せらるるものであると云ふのである。しかしかくの如くであるならば彼等の實踐的要求と理論的精神とは一致すと云はるべきか。先づ第一に、若し彼等が主張する様に、資本主義的生產方法の傾向よりして、その唯一の可能なる繼起として社會主義が必然的に結果し來るものであるとするならば、社會主義運動は何の必要があるのか。むしろ到底避くべからざる運命に處し、手を拱してその結果する所のものを結果せしむべきではないか。この批難は唯物史觀に對し

て屢反覆せらるゝ所であるが、實際若し資本主義より社會主義への發展が自然必然的であるとするならば、唯物史觀は理論としては、よし正しとするも、全然新しき生活形式を得んと努力する政策の基礎としては何の役にもたゝぬであらう。若し社會主義的社會が機械必然的に來るものとすればこの新秩序を招來せしめんが爲めに機關を設けてその實現の爲に努力すると云ふことは無駄であらう。しかしながら唯物史觀は元來新社會の實現を促進せしむる實行の基礎として作られたるものであるから、かゝる必至論的、運命論的解釋はマルクス、エンゲルスの意に適ふものであるとは云はれない。彼等の立場よりすれば、必然的に來るものは只人間の行爲によつて來り得るものであつて、行爲する場合と同じく行爲せざる場合にも來るもの、それは云はゞ人間の頭上に存する神祕的威力によるものであると云ふのではなからう。しかしこの場合プランデンプルクのなせるが如く、必然性に重きを措かば人間行爲は單にこの必然性に順應する丈けのことゝなり、従つてかの必然的發展は依然説明に困難を生ずるであらう。又若しクローノーのなせるが如く少しにても實行の方面を重んずれば、史的必然性は絶對的にはあらずし

て制約的のものとならざるを得ない。

それにしても世界を變更せんとする彼等の立場よりして、倫理的價值批判は彼等のなせるが如く拒否せらるべきか。單に事實を觀察して、それが如何にして出現し來れるかを明かにせんとする科學的立脚地よりすれば、當然價值批判は避けられねばならぬ。彼等が科學的たることを標榜する點よりして、これを避けたことは敢て批難すべきことではないが、しかし、科學的立脚地よりして必然的に生起し來るものが同時に實行的意志の對象であると云ふことは出來ない。與へられたる先件よりして、必然的に結果するものが、同時に行爲の對象となるとすれば、一切は行爲の對象とならねばならぬ。個人にとり、集團にとりて善なるものも、又惡なるものも。何となれば惡なるものも、善なるものと等しく、與へられたる原因からして、必然的に結果するが故である。社會主義が資本主義より必然的に結果すると云ふ限りに於ては、それは尙未だ善惡の彼岸に存するが故に、社會主義が直ちに實行的意志の對象となると云ふことは不可能である。實行的意志は、必然的なるが故にこの必然的なるものを對象とするのではなくして、實行することより

の結果によつて自己が満足せらるべしと思惟するからである。自己を満足せしむるものは、自己にとつて價值ありと認めらるゝものたることを要する。社會主義が實現せらるべき努力の對象たる以上、それはその故に價值ありと認められたるものでなければならぬ。理性は常に存した、只必ずしも合理的形式に於て存せざるが故にこれを合理的たらしむべきことは、マルクスの思念する所であつたが、かかる合理的なるものは、彼等にとつては社會主義であつた。唯それは彼等以前の社會主義者に於けるが如く「頭腦によつて作られたる空想的なるものではなくして」その必然的たることが事實によつて明かにせられねばならなかつた。彼等には理想は已に始めに存したもので、科學的たることはこの理想の必然的たることを明かにする方便に過ぎなかつた。ジンメルは云ふ。「唯物論的歴史觀は必然的に社會主義に歸着すとの言を聞かば、それは只社會主義への實踐的意志はこの歴史觀に歸着せねばならぬと云ふ事實の歸結或はその反映に過ぎない」と。この點より見て唯物史觀が自ら客觀的な、リアリスチックな歴史觀なりと思惟するは自己欺瞞である。唯物史觀もやはり多くの哲學的歴史觀の如く、主觀的價值論的見地よ

りして歴史を考察せるものであると云はねばならぬ。

彼等は確かに理想を有した。しかしその理想は單に社會主義には止まらなかつた。實を云へば彼等はプロレタリアートの解放を通して、人類の解放を望んだのであつた。エンゲルスは云ふ。「社會による生産手段の占有は商品の生産を排除し、かくて生産物の生産者に對する支配を排除する。社會的生産内部に於ける無政府的狀態は計畫的にして意識的なる組織によつて代置せられ、個人の生存競争は熄み、かくて初めて人類は或る意味に於て究極的に動物界より分離し、動物的生存條件を出でて、眞に人間的なる生存條件の中に入るのである。從來人間を圍繞し、人間を支配せる生活諸條件の領域は今人間の支配と統御の下に入り來り、かくて人間は自己の社會化の主人となるが故に又これと同時に初めて自然の意識的現實的なる主人公となる」と云ひ、更にかくて人類は從來自己を支配せる自然と歴史の外的威力より脱却し己れの自由な行動によつて、有意識的に社會を經營し、歴史を創造する、そは必然の王國より自由の王國への人間の飛躍であると云つて居るが、この必然より自由へ、無意識的より意識的へ、他律より自律への道こそ、實

に獨逸觀念論を一貫せる根本主張であつた。唯物史觀は極力獨逸觀念論に反對するが、しかもそれはこの點に於て全然その支配を脱却することは出来なかつた。只彼等はこの支配を蔽ふに彼等の所謂科學的と云ふ衣裳を以てした。唯物史觀は無論公然たる理想主義ではないが、しかし又それは純然たる自然主義でもあり得ない。それはむしろ自然主義にかくれたる理想主義であつた。